



拝啓

「知覧特攻平和会館建て替え計画」

必中必死。
十死無生。
航空における特攻作戦は、爆弾をつけた戦闘機ごと敵に突っ込むというものでした。これは、海軍陸軍で行われ、特攻に赴く機体者はおよそ 3000 名にも及びます。その多くが 10 代から 20 代の青年たちでした。
彼らは死を覚悟し、沖縄に向かって飛び立って行ったのです。

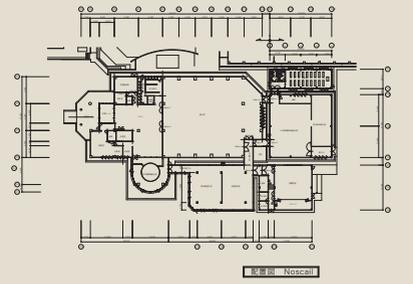
彼らが出撃前に書いた遺書には、家族、恋人、仲間への思いが綴られています。「何を考え、何を懸って、彼らは旅立っていたのか」彼らに思いを巡らせることは、過去を風化させず平和な未来へとつながっていくのではないのでしょうか。

現在も世界の様々な場所で戦争が絶えません。今を生きる私たちに何ができてしまうか。

哲郎おじさん
あなたはどんな思いで旅立ったのですか。
私は未来に向かって生きていきます。

05 知覧特攻平和会館

知覧特攻平和会館は鹿児島県南九州市知覧町郡にある、陸軍特攻隊に関する展示を行う平和博物館である。知覧飛行場がこの地に位置していたことから、特攻隊に関する遺品館が建てられ、その後遺書の収蔵数増加のため、現在の形で展示が行われている。メインは遺書複製を使った展示であり、知覧からの出撃者だけでなく、陸軍全体の出撃者の遺書が集められている。一方で、知覧とは直接の関わりがない、海軍の零式戦闘機が展示されているなど、誤解を招きかねない展示がなされている部分がある。



知覧特攻平和会館の様子 (出典：知覧特攻平和会館)

06 南九州市知覧町郡における現地調査

知覧周辺の戦争遺構

知覧特攻平和会館の周辺には、知覧飛行場があったことにより、多数の戦争遺構が残されている。それらある場所には、そのものがどのように使われていたのかといったことやどういった場所であったのかといったような説明書きのされた立て看板が建てられていた。広範囲に広がる戦争遺構は、飛行場がどれだけ大きかったのかということを知る手助けになる。一方で、特攻隊を目的としてこの地にくる観光客の多くが、知覧特攻平和会館の入館のみで、そういった知覧という地域全体に対しては目も向いていないと感じた。そうした残されているものと結びつけ、地域全体を見通すことによって、よりここで起こったことであるというリアルな学びが得られるのではないだろうか。



知覧の戦争関連施設 (本人撮影)

開聞岳

開聞岳は、鹿児島島の南端に位置する大きな山であり、知覧の街ではいたるところから見る事ができる。特攻隊は出撃の際、離陸してからこの山を目指して飛び、沖縄を目指していったため、この山が最後に見た本州の景色であったという。機械故障により帰ってきた隊員によると、開聞岳を過ぎた頃にはこれまでの迷いの気持ちが消えて死を覚悟したという話もあった。現在の知覧の風景は、戦争以前の姿と同じように、茶畑やさつまいも畑の広がるのどかな景色が広がっており、とてもここが飛行場であったということは想像できない。しかし、速くそばえた開聞岳を見た時、これが特攻隊員の見た景色なのだろうか、初めてここで本当に起こったことなのだとして理解することができた。



地理院地図より本人作成

01 背景

私のまだ道半ばの人生において、「戦争」は私自身に大きな影響を与えてきた。小さい頃に買ってもらったアンネの日記。歴史の図鑑の中のアウシュビッツ。アニメや映画の中で描かれる戦い。そして現実で起きている戦争。平和な日々を過ごす中で、不思議とそういったものに引かれ、感傷的にあるあまり時には眠れなくなることもあった。戦争ということを認識した一番最初の記憶は戦争体験者である祖父と話したことである。祖父の話の中には、特攻隊として死んでいった「哲郎兄さん」が登場していた。彼が亡くなったのは、27歳。私の年齢とそう変わらない彼は、何を思っで出撃していったのだろうか。彼らは、確かある人にとっては神様と崇められる存在でもあり、戦争加害者であるのかもしれない。しかし、彼らは、その前に私たちと変わらない一人の青年なのである。彼らがどう生き何を思っていたのか、知ろうとすることが、悲劇を繰り返さないことにつながるのではないかと私は思う。

02 特攻隊

「特別攻撃隊」通称「特攻隊」は、決死の任務を行う部隊である。第二次世界大戦の激化により、沖縄を防衛ラインと考えた日本軍はそれを死守するために、敵の艦隊に飛行機ごと体当たりを行うという非人道的な作戦を決定した。特攻は陸海軍から 1945 年 4 月 6 日の第一次総攻撃以降、大規模に行われるようになり、公益財団法人特攻隊没者追善顕彰会によると、3 月中旬から終戦までに沖縄方面で戦没した航空特攻隊員の数は、海軍で 1,961 名、陸軍で 1,029 名となっている。近年、特攻隊を題材にした小説や漫画、映画などによって、特攻隊は広く知れ渡ってきた。一方で、特攻隊に対する社会的な認識はさまざまであり、大死に論や英霊論など、現在でも議論がなされている。一つ確実に言えるのは、死んでいった人々がいること、二度とこのような手段をとってはいけないということである。



出典：知覧特攻平和会館

03 日本の平和博物館



戦争の歴史を伝える媒体として平和博物館と呼ばれるものがある。主な平和博物館の構成は、戦時中の状況、被害などを写真などの資料や、戦争体験者の語りによって後世に伝えるものとなっている。修学旅行や校外学習で平和教育のために使われたり、近年では過去の悲劇の地を巡るダークツーリズムの場となったりと、戦争を体験していない世代にとつて過去の歴史を知り、戦争の悲惨さ平和の尊さを学び、悲劇を繰り返さないようにする学びの場となっている。一方、戦争を扱うという特性上、平和博物館では偏向展示といった問題が起きやすい。偏向展示とは、一方からの偏った思想や政治的側面によって展示を行うことで、閲覧者が正しい情報を得ることができない展示である。そのため、できる限りニュートラルな事実を後世に伝えられる平和博物館が求められている。

04 遺書

特攻隊の平和博物館の中で主な展示物として遺書が挙げられる。突然の空襲などで命を奪われた戦争被害者とは違い、特攻隊員は事前に死を覚悟して遺書を書いてから飛び立つ。そのため、遺書は、特攻隊員の内実を知りながら書いた手紙である。私は、遺書を出撃前に大切な人に宛てて書いた最期の手紙であると捉え、これを展示の空間構成と結びつけた設計を行う。



小笠原隆少尉の遺書 (出典：知覧特攻平和会館)

07 設計内容

現地調査や文献調査などから平和会館において以下を課題点として挙げる。

①過度な悲壮感の演出がなされていること
戦争を扱う上である程度の厳格さは求められているものの、それ以上に重苦しい印象を与えてしまっていると感じた。これは、展示室全体が暗く照明が落とされており、メインの展示室では開口部もなく外部とは隔離された空間となってしまうためだと考えられる。

➤外部との繋がりを持たせる
外部空間に対して開けた空間にすることによって、これまでの暗い印象から明るい学びの場とし、平和学習に対するハードルを下げる。また、地域住民も使用できる交流スペースの機能を持たせることによって、地域と結びついた施設となる。

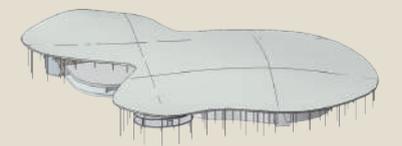
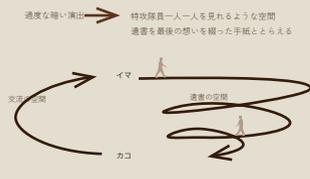
②展示物に一貫性がなく、誤解を生みかねない展示が行われている
知覧飛行場は陸軍の飛行場であったため、平和会館で展示されている遺影や遺書、戦没者数などは全て陸軍のものであり、海軍における特攻はカウントされていない。一方で、展示物の中には海軍の特攻機である零戦があったりと、展示物が多いことにより、誤解を生みかねない展示が行われてしまっている部分が見受けられる。

➤遺書に焦点を当てた展示空間
最も多い展示物である遺書に注力することによって、わかりやすい展示空間を設けることができる。
③周辺環境との結びつきが希薄であること
戦争遺構や地域との関わりが希薄であることにより、体系的な学びに結びついていない。

➤周辺環境と結びつけた建築
旧飛行場や滑走路、開聞岳といった軸線を重視して建築をつくることによって、過去と現在の知覧町郡を比較できるようにする。より現場性を感じることができるようになる。

site 1 平和会館

既存の知覧特攻平和会館の建て替え遺書を最後の手紙として捉える



site 2 展望

知覧の街を見下ろし、時間の経過を感じる自分を見つめ直し、誰かを思う

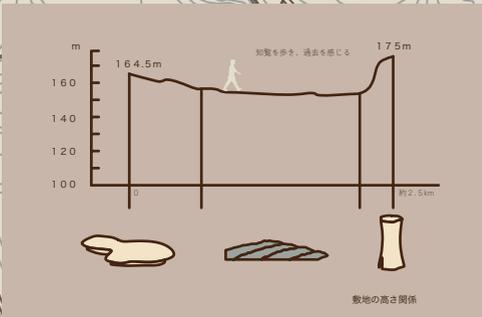
遺書からの今の平和、変わらぬ過去の記憶を誇る飛行場を眺め変わってゆく風景の中に、変わらない開聞岳をみる



site 3 燈



防湿ファン (一部電柱) にあかりをつける滑走路のラインをぞり、畑に浮かび上がらせる



site2 展望

元知覧飛行場の位置

滑走路の位置

site3 燈

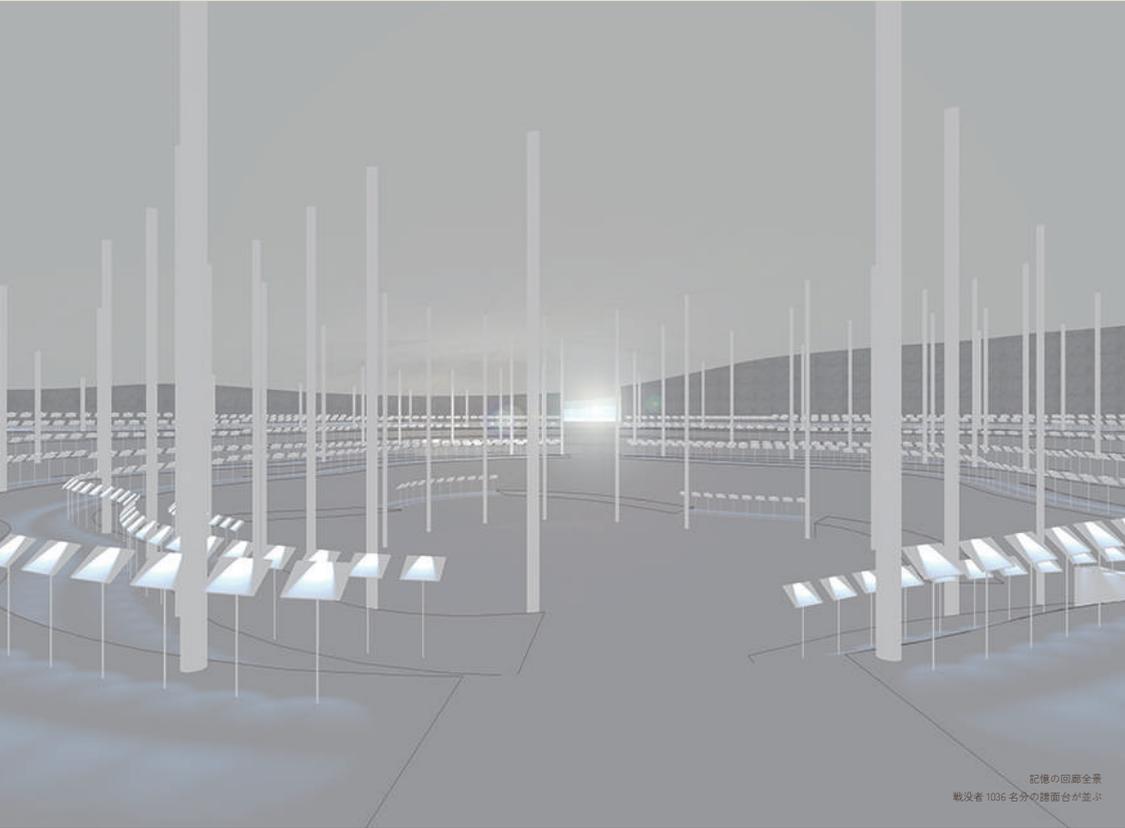
茶畑・さつまいも畑

site1 知覧特攻平和会館

08 全体敷地

敷地は、知覧の街全体を覆うかつて知覧の飛行場であり、今は畑となっている街をたどりながら過去から現在への変化を感じる

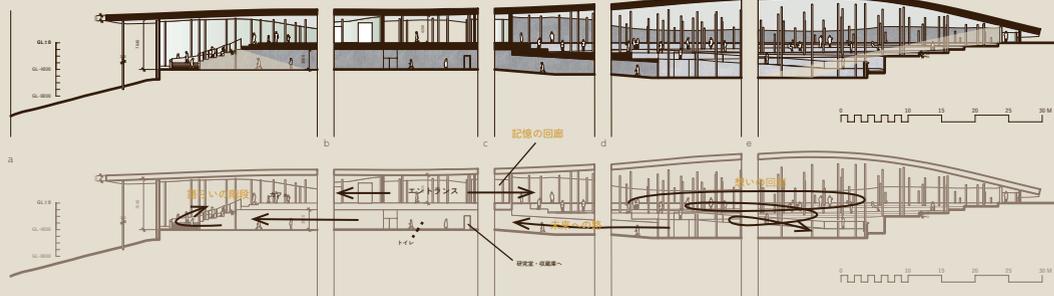




記憶の回廊全景
戦没者1036名分の顕彰台が並ぶ



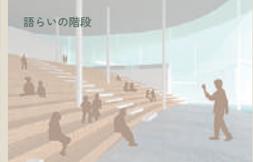
平和会館 動線



遺書空間 - 記憶の回廊

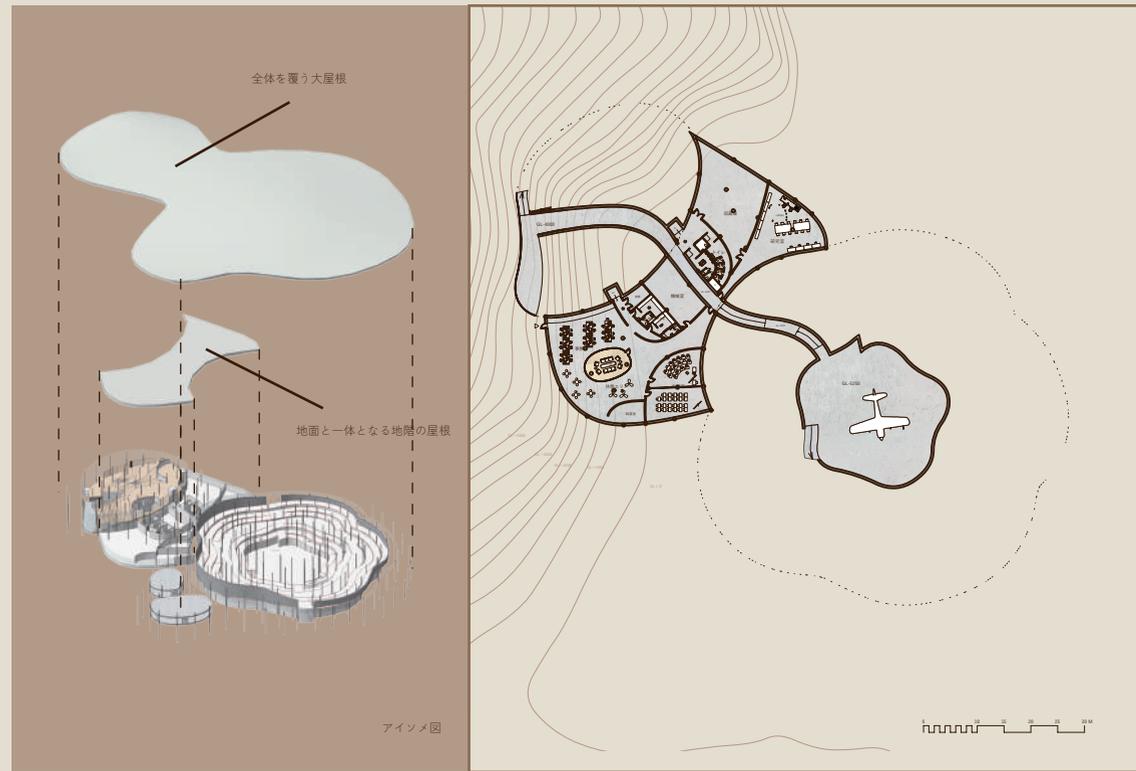
顕彰台の展示台に随筆や戦没者の戦没者、1036名分の遺書と遺影が並ぶ。来館者はスローを降りながら、彼らの最後の手紙を見る。一人一人の想いを感じる。

交流空間 - 憩いの階段、語らいの階段



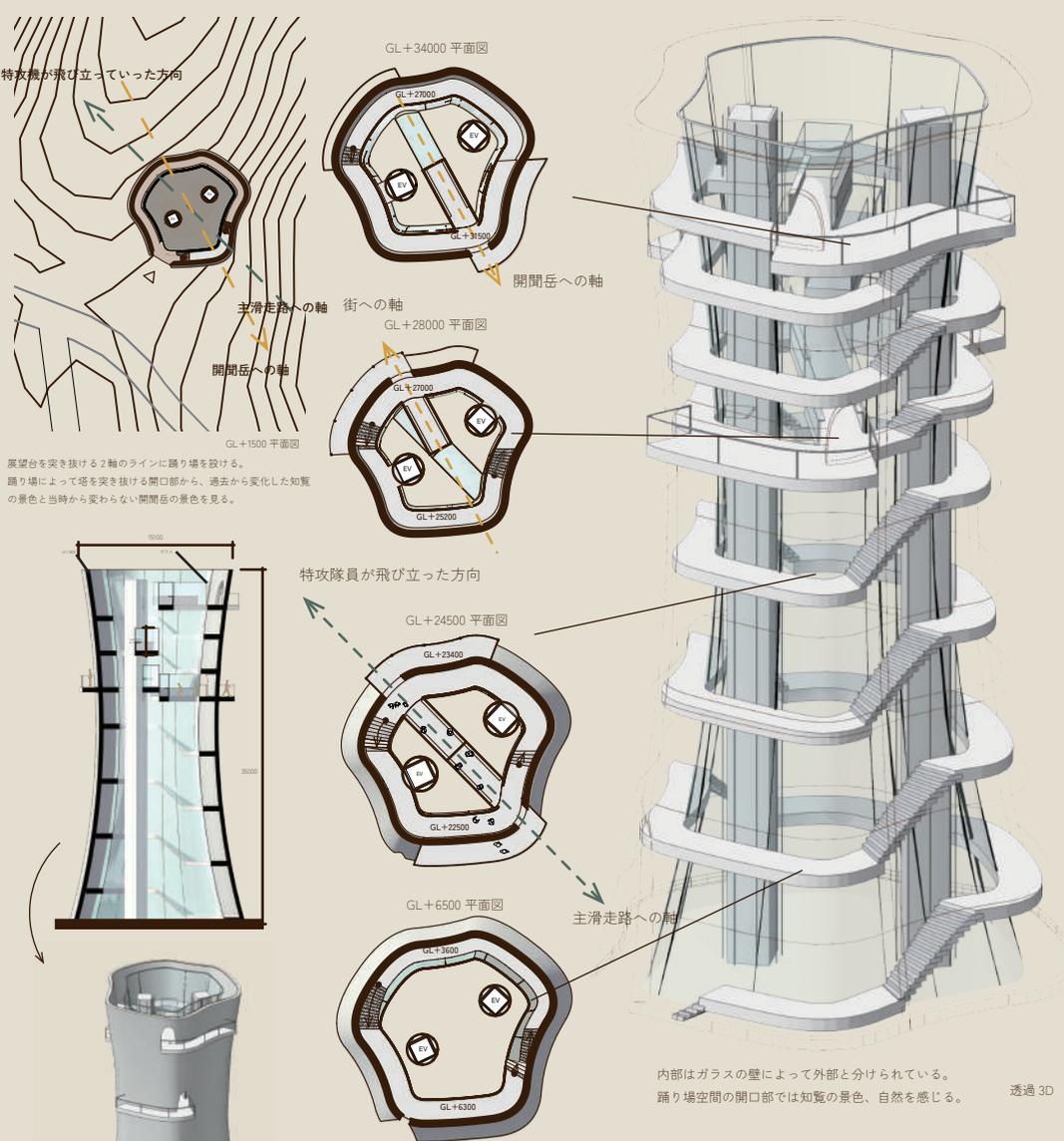
緩やかな曲面の大階段。カフェの飲食スペースとなったり、休憩空間となったりと、さまざまな使い方ができる。平和記念公園の景色を見ながらくつろぐ。

放射状の段になっており、講義などで使用できるような階段である。語り部による講話もここで行われる。



09 site 1 平和会館

遺書空間と交流空間からなる平和会館
想いが込められた遺書を読み、彼らが一人の青年であり、
確かに生きていたことを知る



展望台を突き抜ける2軸のラインに踊り場を設ける。
踊り場によって塔を突き抜ける開口部から、過去から変化した知覧の景色と当時から変わらない開聞岳の景色を見る。

特攻隊員が飛び立った方向

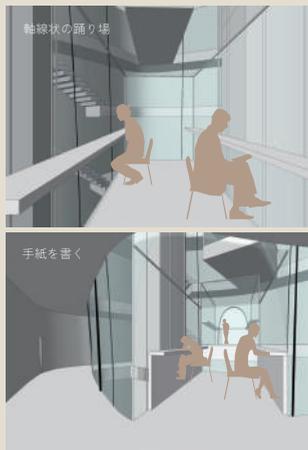
主滑走路への軸

内部はガラスの壁によって外部と分けられている。
踊り場空間の開口部では知覧の景色、自然を感じる。

透過 3D

踊り場—手紙の空間

踊り場は手紙を書く空間にもなる。
平和会館の遺書を見てから、街、茶畑を通り、現在の知覧を感じる。街から少し離れた展望台まで辿り着くと、そこは自分を見つめ直し、過去と現在がオーバーラップした空間となる。
踊り場では、その時感じた想いをしたため、誰かに伝える手紙を書ける空間となっている。



10 site 2 展望

平和会館から少し離れた山の中につつ展望台。
この場所からは、知覧の町全体、開聞岳を見通すことができる。
飛行場の痕跡もほとんどないこの町の過去の軌跡を、二方向に伸びた踊り場からの軸線で表す。
階段を巡り自身と見つめあった時、眼前に広がる平和に何を思うのだろうか。
そして、誰に何を伝えたいのだろうか。



以前飛行場であったところには畑が広がっている。その姿は跡形もなく消え去り、現在ではそれを感じる事ができない。
一つの滑走路跡の軸に合わせてあかりが浮かび上がるようにする。
茶畑に霧が降りないために設置されている防湿ファンを引用し、上空に向かって燈を灯す。それは夜になると夜空に過去を浮かび上がらせる。展望から見ると、それは開聞岳に向かって飛んでいった特攻隊に対する慰霊のあかりのように見える。

11 site 3 燈

茶畑、さつまいも畑へと回帰した場所に、当時の滑走路のラインを浮かび上がらせる。
夜になると光が闇夜を照らす。

